かれは紙であふれたつくえにもたれている。かたわらにあるタンブラーには、かれたスミレがさしてある。かれのかみは茶色で細かくちぢれ、くちびるはザクロのように赤く、大きくてゆめ見るような目をしているかれは、げき場のしはい人のためにしばいを完成させようとしている。けれど、あまりにも寒いのでもう書くことができないのだ。だんろの中には火の気はなく空ふくのために気を失わんばかりになっている」「もうひとばん、あなたのところにとまりましょう」ほんとうによい心を持っているツバメは言いました。「もう一つルビーを持っていきましょうか」「ああ。もうルビーはないのだよ」王子は言いました。「残っているのはわたくしの両目だけだ。わたくしの両目はめずらしいサファイアでできている。これは一千年前にインドから運ばれてきたものだ。わたくしのかた目をぬき出して、かれのところまで持っていっておくれ。かれはそれをほう石屋に売って、食べ物とまきを買ってしばいを完成させることができるだろう」「王子様」とツバメは言いました。「わたくしにはできません」そしてツバメは泣き始めました。「ツバメさん、ツバ

メさん、小さなツバメさん」と、王子は言いました。「わたくしが命じたとおりにしておくれ」そこでツバメは王子の目を取り出して、屋根うら部屋へ飛んでいきました。屋根にあながあいていたので、入るのはかんたんでした。ツバメはあなを通ってさっと飛びこみ